

聖書の学び／2000年

桑 栄 一

- 1月16日(年間第2主日) ここで「あなたがた」と複数形になっていることに注意しましょう(Ⅰコリ6:19)。切り離された個人ではなくて、共にミサをささげている会衆に向かって聖書は語りかけているのです！
- 1月23日(年間第3主日) 私たちに“罪のゆるし、からだの復活、永遠の命”を与える十字架のいけにえを、教会はイエス・キリストが再び来られる終りの日まで、これからもミサにおいて記念して行きます。神の子イエス・キリストの十字架と復活を信じる信仰……、それが福音への信仰であり、その福音は神の国の福音なのです。
- 2月20日(年間第7主日) しかし、「あなたの罪は赦される」という主イエスの言葉が聞かれるとしたら、それはやはりミサの中においてではないでしょうか。私たち会衆がミサの中で“アーメン”と唱えるのは、神の子イエス・キリストにおいて罪の赦しが実現したことへの信仰の表現なのです。
- 2月27日(年間第8主日) パウロは……ミサを司る者は聖霊に仕えているのだと言うのです(Ⅱコリ3:6)。言うまでもなくパウロはここで、ミサにおいてパンとぶどう酒をキリストの血と肉に変えてくださる聖霊の御業、このいけにえに与かる会衆をキリストのうちにあって一つにしてくださる聖霊の御業のことを語っているのです。
- 3月5日(年間第9主日) このような、“神が御自分の民を救い出された大いなる御業を記念する”という理解を、私たちキリスト教会はミサによって今日受け継いでいます。何故ならミサはキリストのいけにえの再現であり、キリストの死と復活の記念だからです。「教会がキリストの死と復活の記念を行うとき、救いの力がわたしたちのうちに働きます」(レオ秘跡書)。
- 3月19日(四旬節第2主日) “ニケア・コンスタンチノーブル信条”は、キリスト教の歴史、特にその教理の歴史において非常に重要な位置を占めて来たものです。特に教会が使徒継承によって受け継いで来た“ケリユグマ(宣教)”の理解についての“東西両教会が共有する信条”であるということに、注意を喚起したいと思います。その教会が(東方にせよ西方にせよ)自らを“一・聖・公・使徒継承の教会である”と主張するとき、必ず告白しなければならない信条が、この“ニケア・コンスタンチノーブル信条”なのです。
- 4月9日(四旬節第5主日) 私たちの身近なところでこれまで行われて来た数々の教会の葬儀のことを思い起こしてみれば、そこで人々が“死”をどのように考えて来たかが分かります。そこでは“死は、大祭司である十字架と復活のキリストによらなければ、そこから決して救い出されることのない永遠の滅びである”ことなど、全く語られはしませんでした。
- 4月23日(復活の主日) 人々が“信じた”から、それで主が復活されたというわけではありません。人々が“理解した”から、それで主の復活は本当だったということになったのでもありません。ケリユグマ(宣教)は、弟子たちや教会が考え出したものではなくて、死者の中から復活された主が聖霊を与えて弟子たちに理解させ、教会に委ねてくださったものだったのです。
- 5月21日(復活節第5主日) 人はミサに参加することによって、キリストにつながっています。キリストは私たちのミサに来てくださって、その祭壇に与かる群の一同とつながってくださいます。このように、ミサを抜きにしては、私たちは“キリストにつながる”ということを考えることが出来ないし、“豊かに実を結ぶ”ということもミサから切り離しては正しい意味を持たなくなってしまいます。
- 5月28日(復活節第6主日) 私たちがミサで聖書の朗読を聞くと、神のことはここに集まった“ミサをささげる群”に向かって語られます。同様に私たちが自分の部屋で私的に聖書を開いて読むときにも、これ

は本来“ミサをささげる群に向かって語られているのだ”ということをお忘れないようにしましょう。

- 6月11日(聖霊降臨の主日) 私たち教会にとって、宣教とは“使徒たちの宣教”であり、その内容は“キリストの福音”であることを、一緒に再確認したいと思います。
- 6月25日(キリストの聖体) 新約聖書はこのような“ミサをささげる教会”から生み出された書物ですから、教会が今日に至るまで使徒継承によって受け継いで来た信仰と典礼に固く結びついています。私たちは主日ごとのミサに与かる歩みの中でこそ、教会の信仰と典礼の光に照らして、聖書をより深くまた正しく理解することが出来るのです。
- 7月9日(年間第14主日) 私たちは“不信仰”という強力な現実を目を奪われてはなりません。私たちは実際、そのような現実と妥協しながら教会活動の労苦を共に担って行きます。しかしそのような“不信仰”の現実はそのままに……、神の救いの御業はいささかも妨げられることなく、今日も神の国の到来の日を目指して進められていることを信じようではありませんか。神は、罪によって「倒れていた世界を、キリストの死によって新しいのちに立ち直らせてくださいました。」(今朝の各年共通集会所祈願)
- 7月30日(年間第17主日) 真のキリスト教会は“ただ一つ”であって、様々なキリスト教会があるのではありません。教会は“一つの希望”に与かるようにと招かれているのであって、様々な希望、様々な信仰があるのではありません。各地の諸教会で主日のミサがささげられるために、司祭と会衆が集まって来て囲むキリストの祭壇は“ただ一つの祭壇”であって、様々な祭壇があるのではありません。その祭壇から、代々の時代のキリスト者たちは同じキリストの御聖体を拝領して、キリストの体である“一つの教会”に造り上げられて来ました。
- 8月6日(主の変容) 私たちの“メシア／救い主”としてのイエスを理解する上で最も大切なことは、その受難と復活についての聖書の証言に耳を傾けることです。「わたしたちの罪のために死に渡され、私たちが義とされるために復活させられた」(ロマ4:25) イエスに目を向け、すべてをそこから理解することが正しいキリスト理解の出発点であることを、今朝の主の変容の祝日の福音は vv.7-9 において強調していることに気付かなければなりません。
- 8月20日(年間第20主日) “永遠”とは、“滅びに至るこの世”に対比させて使われている用語です。“永遠”とはやがて到来するのを教会が待ち続けている“神の国”のことであって、“来たるべき世”です。決して“この世”の延長ではないことに注意する必要があります。“永遠”とは、この世がいつまでも永く続くという意味ではありません。イエス・キリストの御聖体に与かっている私たちは、“永遠の命”すなわち“来たるべき世の命”を得ており、イエス・キリストは終わりの日に私たちを“神の国に……!”復活させてくださるのです。
- 9月24日(年間第25主日) 主イエス・キリストは私たちを罪と死から救うために、御自身をいけにえとして献げて奉仕してくださいませ(フィリ2:6-8)。このキリストの祭司としての奉仕による救いの業を、私たちは主日のミサで記念します。それだけではなく、私たちも教会の頭であるキリストの祭司の務めに与かってその奉仕の業に参加し、共にミサをささげるすべての人に仕えます。……ですから今朝の福音書の中のイエスの言葉、「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」(v.35) は、ミサをささげる民である教会のことを言っているのです。
- 10月1日(年間第26主日) 私たちのカトリック教会とは関係もなく、また私たちの全く知らないような活動団体に対しても、私たちが寛容であるべきことを、今朝の福音書は勧めているのではないのでしょうか。ただそのような寛容さと同時に、私たちは“教会が受け継いで来た使徒継承に「逆らわない」という基準で考える”ということにも、目覚めていたいものです。私たちは終末の裁きのときに、審判者である再臨のイエス・キリストから「あなたはわたしたちの味方でした」と言っていただけることを期待して、共に「あわれみの賛歌」を歌っている会衆なのです。
- 10月8日(年間第27主日) 私たちの生きている“この世”は、罪によって混乱している世の中なのです。し

かし、創世記2章の物語りそのものが、元来そのような罪によって混乱している世の中で語られて来たのだということに、注意を喚起したいと思います。神の民イスラエルは、人類がすべてエデンの園から追放された者の子孫であることを知っている民でありました。

11月5日(年間第31主日) 私たち新しいイスラエルである教会にとって、この「唯一の主」とは御子イエス・キリストの父なる神であります。私たちは十字架のキリスト、祭壇のいけにえのキリストから切り離して、抽象的普遍的に“主なる神”を考えることは出来ません。この世には諸々の神々や諸々の霊が実際に働いているとしても、私たちミサに集まる民にとっては“イエスキリストの父なる神”以外には「主」はいないのです。

11月19日(年間第33主日) 第二バチカン公会議後に刷新された新しい典礼暦では、年間の主日の数え方は、王であるキリストの祭日の前の主日が第33主日となるように後ろから数えるので、四旬節から復活節にかけて年間が中断されている間に、毎年その幾つかが省略されることとなります。これは典礼暦の終わり頃の主日でどの年にも終末の日の到来についての聖書のメッセージを聞くという、古くからの教会の伝統が受け継がれているからです。

12月3日(待降節第1主日) 人の子なる主イエスが終末の裁き主また神の国の王として来られる時、み前に立つことが出来る聖なる民の中に私たちも確かに加えられるように……、いつも目を覚まして祈っている(v.36)教会であることこそが、今年も私たち一同の第一の課題であることを、待降節第一主日の福音書は思い起こさせてくれるのです。全世界が毎年この期節になるとその降誕を祝うイエス・キリストは、終末の裁き主また神の国の王として来られる“人の子なる主イエス”に他なりません。

12月17日(待降節第3主日) 来たり給うキリストを迎えるという期待の中で福音を聞き、その期待の中で主日のミサをささげて歩んで行くということが、教会の本質的な要素であることを、いささかの割り引きもなしに現代にまで伝えてくれる役割を、典礼暦は果たし続けて来ました。待降節はその典礼暦の冒頭に置かれている期節なのです。